
嘘で咲かせた涙

2号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘で咲かせた涙

【Nコード】

N6645B

【作者名】

2号

【あらすじ】

ほどほどに何でもできる、だが突出した特徴をもたない、そんな平凡な14歳熊谷晃。大した変化の起きない生活に退屈しながらも、静かで平和な日常を過ごしていた。しかし、ある日を境に静寂はかき消され、平和な日常にもヒビがはいる。気遣いのつもりだった嘘は、晃の日常に変化と涙をもたらした。小さなキツカケから悲しみを生んだ恋愛物語。

ブローグ

人が歩く道には、たくさんの分かれ道が存在する。

どの道がどんな未来に繋がっているかなんて誰もわからない。

でもどの道を選ぶかは個人の意思の自由だ。

環境や性格によっては不本意な道を選んでしまう人もいるが、結局はその人の意思だけだ。

だけど、自分が選んだ道にもかかわらず、予想外の失敗や過ちを犯してしまうと、

「これが運命だったんだよ」

その一言で片付けてしまう人もいる。あのときの俺はそうだったのかもしれない。

自分が歩んだ道を、まるで抗えない「何か」に強制されたかのような、実に都合のいい言葉。

その一言を言ってしまうえば、自分への責任が軽くなったような気もする。

責任を存在しない「誰か」になすりつけれる、そんな気がする。

だけど、運命の一言で自分の人生を片付けれる人間などいない。

不幸な人生、それが自分の人生なのだと納得できるわけがない。

幸せを求め、探し続けるに決まってる。

不幸に慣れ、幸せに失望し、なにも期待せずにただ生きるだけの人生。

それさえも運命なんだと受け止めれる人間なんていない。

運命だと受け止めたとき、その人はある意味人間をやめたとも言えるかもしれない。

人は常に自らの意思で歩んでいる、だから俺は信じてない。

不幸を運命という言葉で片付けるのは現実から逃げている奴の言葉、だから俺は信じてない。

あんなのが俺の運命だなんて・・・・・・・・

俺は絶対に信じない！！！！

ハジマリ

「ずっと好きでした」

それは予想できなかった言葉だった。

俺はいつもどおり退屈な授業の大半を睡眠学習に費やし、放課後はお気に入りの場所（屋上）で日向ぼっこをして過ごした。他の奴らは無駄な時間を過ごしていると俺を見ると俺を見るかもしれないが、俺はこの生活が好きだった。

確かに退屈と感ずることもあるが、それはわがままな考えだし、退屈と思えるほどのゆとりが気に入っていた。

下校時間まで残り10分くらいになると、教室に戻り、帰り支度をしてまっすぐ帰る。

そんな変哲もない毎日を俺は気に入っていた。

ただ今日はいつもより早めに帰り支度をしていた。早いといっても10分程度だ。そこに違和感を覚えることはないし、それはきっと意味のないものだと思う。だから俺は、何も気にせず教室のドアに手をかけた。

「ふえっ!？」

間抜けな声が綺麗に八毛る。

そりゃドアが勝手に開いたら間抜けな声ぐらいでるさ。しかし、俺の目の前にいる結城綾子ユウキ アヤコはソレとは違う理由があるようだ。まあ、

そんなことはどうでもいいのだが。

「忘れ物か？」

「ううん、ちよつと用事があつてね。」

そう言つて綾子はなぜか目をそらす。それが自分でも信じられないほど気に食わなかった。ついつい悪態をつこうとしてしまう。しかし、それよりも早く綾子が口を開いた。

「晁、ちよつと……いいかな？」

綾子が俺の暇を探るときは大体ろくでもない頼みごとを託すときだ。こいつは俺の家が隣ということを上手に利用する。重いものを運ぶときは否応なしに俺を駆り立てる。

「なんだよ？買出しの手伝いか？」

「ち、違つ違つ……ちよつと言いたいことがあつてさ」

「お小言か？今日は1回も授業サボってないぞ。」

「いや、そんなことじゃない……つてか授業はサボらないのが普通。」

お小言以外の用事となるとわからない。あまりいい方向には向かわない気がする。

「じゃあなんだよ？もうすぐ下校時間だぜ、とつとと帰らないと門閉められるぞ。」

「ハハ、あんま急かさないでよ、こっちはけっこういいっぱいなのに。」

そう言いながら綾子は胸に手をあてて、深い呼吸を繰り返した。自分の弱いところを抑えて強がろうと必死になっているように見えた。何をするつもりなんだ？

また間抜けな顔をしていたであろう俺を、綾子はまるで諷めるかのような目で見た。そして、腹の底から大声をだすような動きをして、その口を開いた。

「好きです」

俺はその4文字の言葉を理解できなかった。

「ず、ずっと……ずっとずっと前から、好きでした」

顔を真っ赤にして、綾子は俯いてしまった。

綾子の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかった。しかも俺に對して……

綾子とは小学校からずっと同じ学校で、家も隣だから、いつも遊んでいた。俺は弱虫だったからすぐに泣いた。それを綾子はいつも慰めてくれた。

綾子は俺にとって親友だった。姉貴だった。その綾子が……

——俺に好きだと？

「晃？その……できればすぐ返事を聞かせてくれないかな？沈黙は耐えれないや、ハハハ。」

綾子は曖昧な笑顔を浮かべていた。その理由は俺もわかっている。

今まで恋愛には全く触れる事なかった俺も、この歳になって初めて気になる人ができた。ある日の放課後、いつも通り屋上へ向かったがそこには先客がいた。

夕焼けを背にフルートを奏でる少女、それが小野木由奈^{オノギ ユナ}だった。由奈は決して自己主張の強い人間ではないが優しい子だった。

そこまで頻繁に会話を交わせたわけではなかったが、俺はあの日の彼女を忘れることは出来なかった。

綾子是由奈の存在を知っているハズ。

そして、俺にとって由奈がどのような存在かも理解しているはずだ。実際、綾子に詰め寄られたこともある。だから、綾子が俺を好きだということが理解できなかった。

「あ、晃……………」

「え、あつ、ああ。」

どうすればいいんだろう？俺は自分の気持ちに正直でありたい。

「これから、私は晃を好きでいていいかな？」

だけど、ここで断ってしまうと……………綾子とは二度と今のようない関係に戻れないような気がする。俺はそんな絶対に嫌だ。

「……………」

俺はどうすればいい？俺はなんて答えればいい？「Yes」も「No」も、どちらを選んでも俺はひとつ失わなければならないのか。なら、俺は…………俺は…………

「…………いい…………ぞ…………」

「…………えっ？」

「ずっと俺を好きでいてくれて……………かわらないぞ」

はつきり言ったつもりだったのに、俺の言葉はとても弱々しかった。俺は自分の気持ちを抑えることになっても、綾子の笑顔を壊したくなかった。

だから俺は選んだのに…………俺は顔を上げることができなかった。すると、綾子は俺の予想していた反応とは全く違う反応を見せた。

「やっぱり晃は優しいね」

「へっ？」

「晃はきつと私のことを考えてくれたんでしょう？昔から喧嘩になつてもすぐ晃は謝りに来たもんね、私が悪いのに、『ゴメンね』つて泣きながら謝ってた。男の子のクセにとか思ったけど、それが晃の優しさなんだよね。だから今の晃の気持ちもうれしいよ。」

綾子は笑っている。さっきの曖昧な笑顔じゃない。いつもの笑顔だ。でも…………

「でもね」

でも……………

「でもね、それじゃあダメなの。晃が優しいのはわかってるけど、今の私にはそれはツライだけなの。」

綾子は泣いている。

ナキゴエ

綾子は泣いた。

俺には綾子が言った言葉がまったく理解できない。
ただわかったのは、拒絶。

俺の言葉の・・・・・・・・否定

「晃は優しいから、もしかしたら・・・・・・・・なんて思っ
ちよっと期待したけど、やっぱりダメだよ。晃がいいと言っ
ても、私は耐えれないよ。ただツライだけだよ。」

じゃあどうしろっていうんだ。

これほど綾子に対して苛つくのは初めてかもしれない。

口調が明らかに乱暴になる。浮かんでくる言葉をただ言い放つ。
しかし、綾子は泣きながらも俺を睨み、強い口調で言い返す。

「晃の優しいところは大好きだけど、私は同情みたいな気持ちで
応えてほしくなんかない！」

体中の温度が上がっていくのがわかる。

「なんでだよ？」

聞かずにはいれなかった。

「わかんないよ」

「なんでわかんないんだよ！自分のことたる！お前言ったじゃねえか、期待してたって。なんでそれを突き放すんだよ、ええ！？」

言葉が凄む。綾子はおびえていた。

それでも俺の中の熱はすでに冷ますことが不可能なくらいに煮えたぎっていた。

頭に浮かぶ言葉が、次々と口から出てくる。

なぜ？　なぜ？　なぜ？

気づくと綾子は泣き止んでいた。ただ暴言を放ち続ける俺を、ずっと見ていた。

その目が俺は無性に気に入らなかった。

まるで俺が悪いことをしているみたいだ。

そんな考えを掻き消すように、さらに言葉が続けようとするが、それよりも先に綾子の言葉がその場を制した。

「そんなの納得できないもん。」

「はあ？」

「そんな同情みたいな気持ちで繋がる恋なんて私は嫌だよ、晃だつてそれくらいわかるでしょ！」

「……………」

何も言えなかった。頭に溜まっていた血がひいていく。

『晃だつてそれくらいわかるでしょ！』

綾子の言葉が頭の中で響きわたる。

なんでだよ？

好きな奴と一緒にいたらそれでいいんじゃないのかよ？

綾子の言葉の意味を俺は理解できなかった。ただ俺が間違っていることを指摘されている。それがなぜか釈然としない。

綾子はまだ俺を睨んでいる。どうやら俺の言葉を待っているようだ。しかし、俺は自信がなかった。俺には綾子が期待しているような言葉言っただけでやれる自信はない。

「わかんねえよ。」

綾子に背を向け、鞆を乱暴にとり、逃げるように教室を出ていった。教室から聞こえた綾子の泣き声が、やけに心を締めつけた。

俺は．．．．．間違っていない

俺は、俺は．．．．．

下校を告げるチャイムさえも、あいつの泣き声に聞こえた。

シロイハナ

気付けば俺は、自分の部屋でうずくまっていた。

—— なんてだろう。

間違ったことをしたつもりはない。俺は自分が正しいと思ったことをした。

それなのに……心が晴れない。

わからない、わからない

どうして綾子は泣いた？

どうして綾子は怒鳴った？

どうして綾子は……？

ドウシテ……？

まるでなにもわからない。

何よりもわからないのが、なぜ綾子が俺を……？

わからない。もう何も考えたくない。

頭のなかでひたすら廻る「わからない」が不愉快だった。

この不快感をかき消すために何かをしたかったが、何もする気になれない。

それでも俺は無理矢理身体を動かし、立ち上がり、ふと窓の向こうををみた。

綾子の部屋の電気は消えている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

意味も無く綾子の部屋を見た自分にイラつき、つい壁を叩いてしまった。

ムシャクシャしながら、まだ頭の中から抜けない五文字を忘れるために俺は外に出た。

瞬間、冷たい何かが体中を打つ。

「あれっ？」

雨が降っていた。かなり強い雨だった。

「こんなに強かったのに・・・・・・・・全然気付かなかったな。」

不思議だった。

いくら考え込んでいたといっても、これだけの雨の音に気付かなかったなんて・・・・・・・・

「とりあえず、外は無理だな。」

あきらめて家に再び入ろうとしたとき、ふと目に入ったものがあつた。

「花・・・・・・・・・・？」

白い花

小さくて、触れれば消えてしまいそうなくらい、弱々しい花。

なのに、独特な雰囲気をもつ見たことがない花。

花に興味はなかったが、なぜか気になった。

しばらく目を離す気になれなかった。

しかし、未だ消えないムシヤクシヤが頭を痛めるため、どうにか興味の的をずらし、俺は部屋に戻った。

なんの花なのか調べようという気にもならず、ただ頭の中のモヤモヤが消えることを願いながら、布団に全てを委ねた。

違和感

あまり眠れなかった。

睡魔は確かに俺を眠りに誘うのに、それ以上に強い何かがそれを許さない。

わかっている。

モヤモヤは消えていない。

消えるどころか、頭痛までしてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ッ」

やけに重い体をなんとか動かそうとする。

窓から見えた綾子の部屋

するとまた、激痛が襲う。

もはや身体が警告しているみたいだった。

綾子に会うなと・・・・・・・・

それでも学校には行かなければまずいだろう。

そう思った俺は、身支度を済ませ、いつもより遅く、確実に遅刻する時間帯に家を出た。

どうせ綾子とは同じクラスなため、嫌でも会うことになるだろう。

「どうすればいいのかなあ？」

返答者などいない世界に尋ねた。

いつもと違う。

同じ道を歩いているのに、誰一人とすれ違わない。

この時間帯だと、近所のおばさんたちが世間話をしながら歩いたりするハズなのに、今日はどうも空気が重い。

昨日から離れないモヤモヤを、さらに増幅させるような雰囲気。

家をでるまでは誰にも会いたくない気持ちだったのに、誰でもいいから自分以外の存在を確認したかった。

異様な雰囲気から孤独感を感じた俺は、すこし足早に学校に向かった。

結局、誰に会うこともなく学校についてしまった。

「うわっ、もう昼休みかよ、ヤバイなあ……………」

12時を過ぎている時計を見て驚いた。

家を出たのが遅かったとはいえ、途中からは歩く速度を少し上げてきたつもりだったのだが、

予想到着時間よりかなり遅れていた。

早く歩いていたつもりだが、無意識のうちに遅くなっていたのか？

「言い訳は……………いつもどおりでいいか。」

遅刻常習犯の俺は、いつもどおり、つまり寝坊という言い訳を考えながら学校に入ろうとしたとき、ふと教室にある人影に気付いた。

こっちを見る。

「誰だ？あの教室だと俺と同じクラ・ス……………」

その正体はすぐには気付くことはできなかった。しかし、足を止めよく見ると輪郭がはっきり見えてきた。

「……………」

綾子だった。

まさか一番会いたくない人間をいきなり見つけてしまうとは……………

まだ俺は綾子にどんな態度で話せばいいのかわからないままだった。告白されておいてあれだけの暴言を吐いてしまった。どんな顔して会えばいい？

そんなことを考えながら綾子から目を逸らそうとした時、かすかな違和感に気が付いた。

「・・・・綾・・・・子？」

綾子の目は冷めている。

いつも元気で、瞳に光を宿していたいつもの綾子とは違う、初めて見る目だった。

もう一度綾子の顔を見ようと教室のほうを見るが、綾子の姿はもうなかった。

「気のせいか・・・・？」

綾子から感じた違和感を疑問に思いながら、俺は学校に入った。

違和感（後書き）

すみません

なんか恋愛というよりもホラーかサスペンスっぽいかもしれませんね。

次話からはもうちょっと速いテンポで書いていこうと思いますので、よろしく願います。

訪れ（前書き）

サブタイトル変更いたしました。

勘違いして別の話のサブタイトルにしてしまいました。

「綾子？」

このサブタイトルはもうちょっと深いところについてかた使おうと思います。

読んでいる方には大変迷惑おかけいたしました。

訪れ

学校内はいつもと変わらない。

昼休みだから少し賑やかなくらいだ。

さっきまで感じていた異様な雰囲気は、まるで嘘だったかのように消えてなくなっていた。

体中の緊張が解けていく。

グウ~~~~~

朝食を抜いてきたこともあり、腹の虫が空腹を訴えている。

「腹減ったな………まだパン残ってるかな」

学校内の売店は、この昼休みが始まるとともに戦場へと化する。

油断すると、お目当てのものどころか何も買えずに昼食抜きということもあり得る。

そして、この時間帯ではほぼ昼食抜きが確定されている。

「どうすっかなあ」

そう言いながら、ひとつくらいは、などと希望を抱いて食堂へ向かった。

すると

「おっ、晃だ。」

「来たね来たねえ、今日はずいぶんと大胆に遅刻したな。」

「昼に登校するくらいならサボればよかったのにな。」

見知った顔の三人組が食堂方面からやってきた。小学校から友人の
オオハナナミ イガラシ ケイゴ ミツイユキヒト
大場七海とその恋人の五十嵐敬吾、中一からの付き合いの三井幸仁
だ。

この三人に俺、綾子がいわゆる仲良しグループだ。

「お前ら昼飯食ったの？」

「ピンポン！今日の献立は焼きそばパンにメロンパン、コロッケ
パンに卵サンドにカフェオレ、いやぁおいしかったあー。」

七海が満足そうに答えた。どうやら他にもいくつかパンを買い、女
の子の一食とは思えない量をたいらげらしく、隣の二人は苦笑いし
てた。

「幸仁、まだなんか残ってたか？」

「残るわけねえだろこんな時間に、行っただって無駄だよ。」

そう言いながらアンパンを投げてきた。

「なんだ……？くれるのか？」

「昼飯食えないツラさは俺も知ってるからな、まっ！困ったときはお互い様だ。」

そんな素晴らしい言葉を吐きながら、その右手はしっかりと代金を催促している。

「あ、あとこれも。」

そういつて敬悟が数冊のノートを渡してきた。

「追試は困るだろ？」

「マジか！？悪い、ありがとう。」

いつもはこんなことをしてくれない奴らが、なぜか今日は親切だ。心が温かくなっていく。

「でも珍しいな、七海ならまだしも幸仁や敬悟が……………」

そういうと幸仁は皮肉そうに笑いながらノートを指差し、見てみると言った。

ノートを開くと、そこにはよく知っているクセ字が並んでいた。

綾子の字だ。

「俺らがそんな面倒なことをするかよ、綾子に渡すよう頼まれたただだ。」

「なんでだ？いつもどおり渡してくれりゃよかったのに……」

そう言いながら、俺は綾子がなぜ直接渡さなかったのか予想がついていた、と言うよりそれしか見当たらなかった。

「知るかよ、俺らが知りたいくらいだぜ。」

綾子は俺を避けている。

「なんか綾子、様子が変わったのよねえ。」

何かにヒビが入っていく音が聞こえる。

「そうだよなあ……いつもは口づるさいぐらいなのに、今日はなんか沈んでいたよな。」

おそらくこのまま放っておくと、ヒビはさらに増えていき、やがて壊れる。

それはいやだ。

どうすればいい？

簡単だ。

謝ればいい。

俺が……綾子に……

でもそれは、昨日のすべてを俺の非として受け止めなければなら
ない。

それはそれでしっくりこない。

俺は悪いことをしたつもりはない。

俺は自分の気持ちを犠牲にしてまで綾子とのつながりを大切にしようとした。

だけど綾子はそれを絶った。

俺は・・・・・・・・悪くない。

モヤモヤがまた湧き上がる。

目の前がまた真っ暗になる。

意識が遠のいていく。

不意に痛みが走った。七海が頬を引っ張っていた。地味に痛い。

「こらあ、聞いてるかあ晃。」

「えっ、あっ……悪い、聞いてなかった。」

七海が呆れ顔しながら両手を頬を離し、腕を組んだ。

「とりあえず命の恩人である綾子にお礼いつときなよ。」

内心、七海に感謝した。昨日のことがあるせいで綾子と話せる気がしなかったのだが、これで少し話しかけやすい。

「ああ、わかった、じゃあ早めに綾子に会いに行くわ、あいつ今どこにいる?。」

「ああ、結城さんなら早退したよ」

えっ?

早退？綾子はさっき教室に……………

「いつ……………帰ったんだ？」

「4限の体育にはもういなかったよ、3限も保健室で寝てたんだよ。」

えっ？

じゃああのときの綾子は・・・・・・・・？

体中から汗がにじみ出てくる。

俺が学校に着いたとき見た綾子、その時間の一時間前にすでに早退している綾子。

綾子・
・
・
・
・
・
・
・
・
?

予感（前書き）

すみません。

めっちゃ間が空きました。

これから頑張ります。

テストとかあるけど頑張ります。

呼んでくださってる方

すみませんが気長に待ってやってください。

予感

綾子は学校にいない

幸仁たちの発言をイマイチ受け止められない。
理解できない。

俺が見た綾子は？

教室にいたのは・・・・・・？

早退した？

一時間前に？

俺がみた綾子は？

体中から汗がでる。

呼吸ができない。

目の前が闇に染まっていく。

「・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・きん・・・・・・・・・・」

俺が見た綾子は綾子じゃない？

「・・・・・・・・あきら・・・・・・・・・・晃！」

ふと視界が明るくなる。
さっきまでの世界がそこに生まれた。

「オイ、晃・・・・・・・・大丈夫か？急にボーツとしゃがって。」

幸仁が乱暴に肩を揺らしてくる。

「晃、風邪なんかい？」

「保健室にいったほうがいいんじゃないか？」

七海と敬吾も心配そうに顔を覗いてくる。

「いや、悪い・・・大丈夫だわ」

決して大丈夫ってわけじゃないが、とりあえず言っておいた。

「いや、お前なんかおかしいって、汗もかいてるし・・・」

「そうだよ、保健室いくべきだって。」

七海が腕を引っ張る。

「いや、マジ大丈夫だから、うんマジで。」

それでも敬吾も七海も、無理やりにも俺を保健室に行かせようとする。

しかし、幸仁が間に入ってきた。

「まあまあ、とりあえず保健室には行きたくねえんだろ？じゃあ教室いくか？ここで突っ立ってるよりは座ってたほうがいいだろ？」

幸仁が二人を制して俺のほうを見た。まだ付き合いは1年程度だが、幸仁のこういうところには助けられてる。

だが、俺は教室にも行く気がなかった。

どうしても綾子が気になった。

俺がいましようとしてることはきつと馬鹿な行動だ。

冷静に考えれば、綾子を見たのも他人の空似だと思えるかもしれない。たとえ本人だとしても、俺を避けているなら会わないのも当然だ。

それでも……確かめなきゃいけない気がする。

嫌な予感がする。

そう思うと俺はすでに教室とは反対の方向に走ろうとしていた。

「おい、晃！どこにいくんだ！」

幸仁が俺を呼び止める。

「悪い！俺午後もサボるわ！」

「はああっ！？」

三人が綺麗にハモった。

「ちょ、おい晃！！待て！！」

幸仁が制止の声を発したとき、俺はもう階段を降りかけていた。

この予感是不確かだ。

この予感に根拠も確証もない。

それでも俺は確かめなきゃいけない。

変化

学校から出て俺はすぐさっきまで歩いてきた道を走り出した。

世界は変わっていない。

いまはお昼時、殆どの家庭は昼飯を食ってるだろう。

だから人とすれ違わなくても、さっきまでのような嫌な気配はない。

ただ・・・・・・・・

嫌な予感の頭の中でいくつもの可能性を創造していく。

最悪綾子は・・・・・・・・

いや、それはない。

綾子がそんなことするはずがない。

頭を振る。

鮮明に映ってしまいう出来事。

早く消してしまいたいからまた頭を振る。

これから起こり得る出来事に怖気づいてる場合じゃない。

重要なのは今だ。

俺は綾子に会わなきゃいけない。

なんとしてでも………

会ってどうするかなんてわからない。

それでも俺は綾子に会わなきゃいけない。

そんな感じに崩れそうになる心を必死に、無理やりにも支えようとする。

そんなやつに信号が青か赤なんかを判断するのは無理だった。

キキイイイイイー――――！！！！！！

ブレーキ音で俺は現実世界に戻ってきた。

車は迫ってきている。

反射的に避けた。

人間ってすげえ・・・・・・・・・・

車も壁や電柱に衝突していなかった。

よく見ると高そうな車だ。

黒い車。

運転席側の窓から男の顔がでてきた。

いかにも、な勾いを漂わせる30過ぎくらいの男だ。

「馬鹿野郎ツ！！！！死にてえのか！！！！」

そう言つて男は顔を引つ込め、車を走らせていった。

車・・・・・・・・・・まったく気付かなかった。

綾子に会う前に閻魔大王に会いにいくところだったぜ。

しかし、こんな住宅街にあんな人らが何でいるんだ？

あまりに場違いだった男たちはいったいなにをしていたのだろうか？

いやいや！

そんなことどうだっていい！

急がなければならない状況なのにどこか余裕を持っている自分が憎い。

まだ俺は心の中で否定している。

嫌な予感、綾子の起こし得る行動

あの綾子に限ってありえない、ありえない。

馬鹿か熊谷晃！！！！

綾子の強さを知っているように、綾子の弱さも・・・・・・・・俺は知っている。

急げ！

何もなかったらそれでいいじゃないか！

俺は余計なことを考えようとする頭を振る。

そしてただひたすら走る。

綾子の家はあそこの角を曲がれば見える。

この角を、

瞬間、世界の空気がその表情を変えた。

「――」

えっ………？

思わず走る勢いを緩めてしまう。

いま、なにか………

「――ら」

後ろから・・・

「あきら」

俺を呼ぶ声

俺の足は止まった。

振り返る。

「あきら……」

「綾子」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645b/>

嘘で咲かせた涙

2010年10月13日15時37分発行